



こんぴらさん障壁画の謎

— 若冲・岸岱をめぐって —

【第7章】

百花図



《百花図》に描かれる花卉の数量は以下の通りである。

•北側 計91図

大床正面に縦8段、横8列の計64図

その左右壁貼付にそれぞれ8段1列の計16図

正面上方の落掛貼付に11図

•西側 計52図

北寄りの壁貼付に5段2列の計10図

北寄り長押上小壁貼付に3段2列の計6図

南寄り長押上小壁貼付に3段4列の計12図

違棚後壁に4段4列の計16図

違棚左右側壁にそれぞれ4段1列の計8図

•南側(二の間との境にある襖4面) 計40図

襖各面5段2列の計40図

•東側 計18図

北寄り長押上小壁貼付に3段3列の計9図

南寄り長押上小壁貼付に3段3列の計9図

(障子腰貼付の花卉4図は伝中川馬嶺筆のため数に含めない)

以上、北側91図+西側52図+南側40図+東側18図の総計201図



植物学者・湯浅浩二氏の調査によると花の図数は多い順にボタン11図、シャクヤク9図、キク8図、アジサイ7図と続く。種数の多い順でいくと、バラ科11種25図、次いでユリ科8種16図、アオイ科5種16図と続く。全部で34科74種203図(2図が2種類を描く)になるという。

花丸という名称が付けられているが、天井画花卉図にみられるいわゆる丸文意匠のように、草花を円形に描くでもなく、円い画面の中に描いてもいない。土居次義氏は、各花卉を折枝風の構図で障壁画に整然と配列して表す構図法から《花丸図》とよばれてきたと述べる¹。

千宗屋氏は南宋絵画の折枝画のように団扇形の画面を想定し、モチーフが丸く収められていることから花丸の名が示されていると指摘している²。

本図は、自然に咲く草花の情景ではなく、四季の花卉を折枝画の様式で写實的に描いている。

それぞれ、仮想した格子状の枠内に対角線に沿うよう斜め上に傾けて描き、上段の間壁面四方に規則的に配列される。(図1)



図1-1

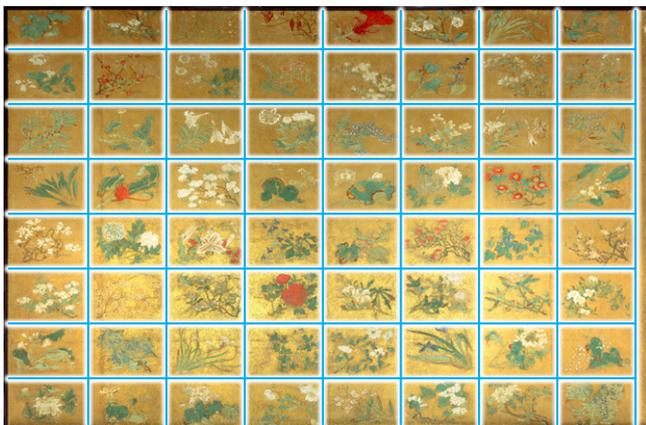


図1-2

若冲は上段の間において、障壁画特有の空間を活かした連続性や立体感のある構図を採用せず、平面で装飾的な観賞画を作りあげた。しかし、ただモチーフを多用し画面を埋め尽くしたわけではなく、配置において若冲独特のデザイン性がみられる。縦軸・横軸は交互にジグザグ状に向きが変わるよう設定されておりズミカルな画面構成になっている。(図2)



図2

一方、対角線に沿っては向きが一直線となり、互いの平行線が交わると幾何学的な襷文があらわれる。(図3)



図3-1

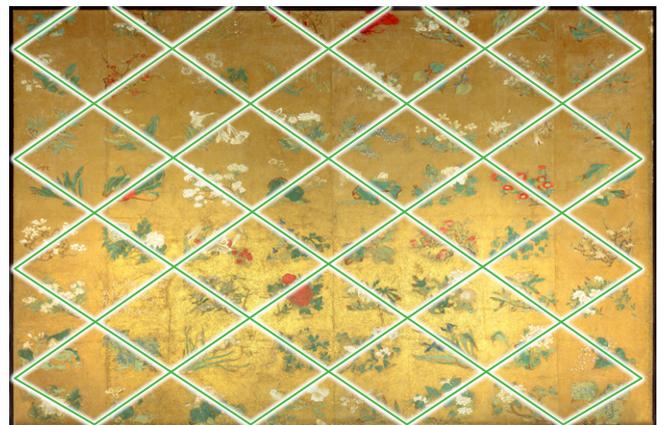


図3-2



また、別の見方として、仮想した枠内に花卉を対角線に沿って双円錐形になるよう描いていると捉えれば、花卉4図で円になり花で丸を形作る。(図4)

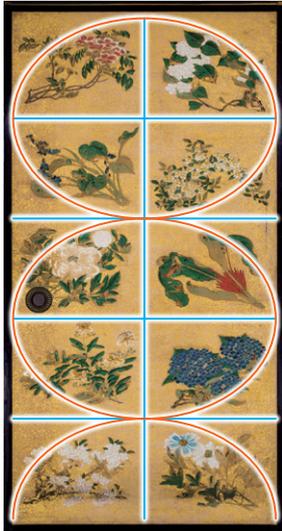


図4-1



図4-2



図4-3

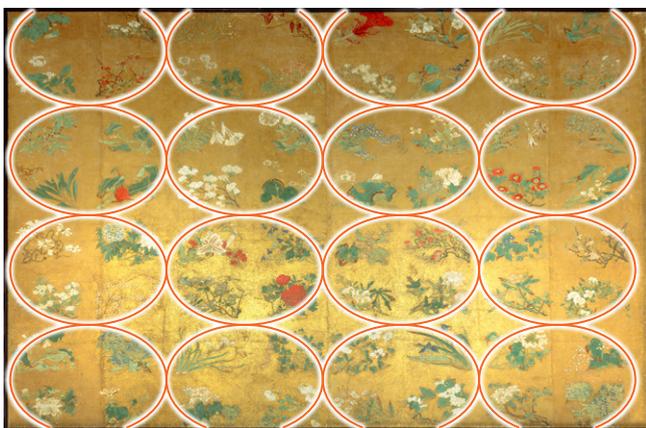


図4-4

この円を重ね合わせると吉祥を意味するとも仏教の七つの宝を示すともいわれる七宝繋ぎ文があらわれる。(図5)



図5-1



図5-2

若冲の作品には幾何学的な構図や形態がみられるという³。江戸中期、日本の画家に大きな影響を与えた沈南蘋やその弟子による分割法を用いた画面構成や円を用いた構図様式を若冲も取り入れており、若冲が最も円構図法を使用したのは《動植綵絵》を制作した宝暦5年(1755)～明和元年(1765)であるという考察もなされている⁴。

花卉を規則正しく配置した結果、文様のような可能性はあるが、意図的に若冲が隠し図形を仕掛けていたとすれば興味深い。ただ単純に花を並べて描いたとは思われず、《百花図》には何か仏教的な思想や宗教性が加味されているのかもしれない。

多様な花の美しさをよくとらえており、丸い虫食い穴、病葉による変色や斑



コデマリ



点等、随所に若冲らしさが垣間見え、ハマナスの茎の細かいトゲや、コデマリの花びら1枚、蕊1本までの執拗で細密な描写は動植綵絵を彷彿とさせる。誇張された形態表現は少なく、写実を基本に、葉や蔓など多少デフォルメして描いているようだ。夏の花が最も数が多く、春、秋、冬の順に少なくなる。季節による配置の規則性はみうけられず、201図中46図は、おそらく共通の下絵を左右反転して写しており、壁面四方それぞれに配される。



左右反転



ユリ



左右反転



シャクヤク

花卉ひとつひとつは細部まで描かれ単純化することはないものの、同じモチーフを図案化し反転させ使用する手法や、一定のパターンを繰り返す構成で装飾美を表現する発想はどこから得たものであろうか。

若冲は宋・元・明時代の中国絵画や清の花鳥画等を模写し学んだ。《百花図》は中国古画の折枝花卉図から着想と骨格を得たのではないかと指摘されている⁵。一方、18世紀になると本草学や園芸が盛んになり、写実的な挿図を伴う図譜がつくられたことから、植物図鑑のようにも見える《百花図》はそういう図譜や標本を基に考え出されたものかもしれない。

現在は素木造りの御本宮社殿も金毘羅大権現時代は彩色が施されており、『金毘羅本社幣殿拜殿建具金物彩色書上帳』（天保3年(1832)8月)によると本社拜殿天井には160枚におよぶ四季の草



[当宮絵図類] 天保三年御本社図(金刀比羅宮蔵)

花が描かれていた⁶。この天井画がいつからあるものかは不明であるが、多種多様な草花の画が歴代別当の好んだ装飾であったとすれば、奥書院上段の間には古くから草花の画があり、その主題を継承し若冲到草花図を発注した可能性も考えられる。いずれにせよ若冲は依頼された四季の草花という画題を換骨奪胎し、折枝の花卉図を壁面四方に規則正しく配すという独創的な表現手法で特別な造形美をもつ室内空間を創り上げたといえる。

注意しなければならないのは、濃密な空間を印象づける金砂子が当初から同様に施されていたかどうかは疑問であり、後補によるものと考えられている。だとすれば、若冲の意図した演出ではない金砂子の使用は、作品本来の魅力を些か損ねているといえる。金装飾がなければ圧迫感も軽減され、現在受ける印象とはまた違う華やかさであったろう。



ウメ



伊藤若冲筆 動植綵絵 梅花小禽図
絹本着色 142.7×79.5
(皇居三の丸尚蔵館収蔵)



ヒマワリ



伊藤若冲筆 動植綵絵 向日葵雄鶏図
絹本着色 142.3×79.7
(皇居三の丸尚蔵館収蔵)



ポタン



伊藤若冲筆 動植綵絵 牡丹小禽図
絹本着色 142.7×80.0
(皇居三の丸尚蔵館収蔵)



アジサイ



伊藤若冲筆 動植綵絵 紫陽花双鶏図
絹本着色 142.9×79.7
(皇居三の丸尚蔵館収蔵)

土居次義氏は《百花図》と若冲の《動植綵絵》に描かれたハス・ウメ・ヒマワリ・ポタン・アジサイなどの花卉や、信行寺、義仲寺の天井画花卉図のヒマワリ・アジサイなどを比較し検討され、年代の隔たりによる多少の作風上の異同はあるにせよ形態描写・独特の作風は共通しており同一画家の作品とみて矛盾ないと結論づけられた⁷。

《百花図》の床の間上部や下部、西面違棚がある床右側壁貼付・左側壁貼付などは壁の寸法に花卉が取りまきらず上下左右不自然に切り取られた箇所がみられる。これは修理の際に切り詰められたか、おおよその寸法で制作し京都から送られた作品を、金毘羅で表具師が切り取り表装したという可能性が考えられる。

此度の修理を行った岡墨光堂の分析によると、本紙は竹紙であるという。竹紙は竹を原料とし製造した紙で、主に中国から輸入していたと考えられており、白く大きい薄く裂けやすい特徴がある。

残念ながら、若冲と金毘羅の関係を裏付ける文献資料は皆無であり、若冲側の資料は天明の大火で焼けてしまったのかもしれない。金刀比羅宮においても明治の神仏分離の混乱期に資料が散逸しているので、その中に記録があったかもしれず、今後の資料発見が待たれるところである。

¹ ②土居次義「讃岐金刀比羅宮の伊藤若冲」『國華』p.14

² 千宗屋「伊藤若冲 百花図(花丸図)」四国新聞、2004.5.30、SHIKOKU NEWS、<https://www.shikoku-np.co.jp/feature/kotohira/index.html>(参照2023-3-13)

³ ③佐藤康宏「若冲伝」p.147

⁴ ⑤辻惟雄「よみがえる天才1 伊藤若冲」p.137、「コラム2」pp.148-153、「コラム3」188-193

⁴ ヒロコ・ジョンソン「沈南蘋の絵画理論とその影響」『東京大学文学部美術史研究室紀要 美術史論叢8』pp.51-60

⁵ 千宗屋「伊藤若冲 百花図(花丸図)」四国新聞、2004.5.30、SHIKOKU NEWS、<https://www.shikoku-np.co.jp/feature/kotohira/index.html>(参照2023-3-13)

⁶ 『金刀比羅宮史料』20巻、34巻

近世には遷座祭における本社彩色に森一鳳や森寛齋、合葉文山ら画家が携わっている。(森一鳳は『金刀比羅宮史料』64巻『金光院日帳』3月2日の条～7月27日の条、森寛齋や合葉文山は『金刀比羅宮史料』80巻『多聞秘書古老伝』上の記事)

明治11年、御本宮再営にあたり、格天井の草花図は桜文様の木地蒔絵に改められた。

⁷ ①土居次義「讃岐金刀比羅宮の障壁画」pp.5-7

②土居次義「讃岐金刀比羅宮の伊藤若冲」『國華』p.18

参考文献

①土居次義「讃岐金刀比羅宮の障壁画」マリア書房、1974

②土居次義「讃岐金刀比羅宮の伊藤若冲」『國華』1046、pp.11-20、1981

③ヒロコ・ジョンソン「沈南蘋の絵画理論とその影響」

『東京大学文学部美術史研究室紀要 美術史論叢8』東京大学文学部美術史研究室、1992

④佐藤康宏「若冲伝」河出書房新社、2019

⑤辻惟雄「よみがえる天才1 伊藤若冲」筑摩書房、2020